

ITP 診断における網状血小板比率 (RP%) および幼若血小板比率 (IPF%) の有用性および ITP 治療における血小板機能測定の意義に関する検討

大阪大学大学院医学系研究科 血液・腫瘍内科 柏木 浩和

大阪大学医学部附属病院 輸血部 富山 佳昭

ITP の診断の基本は除外診断であるが、特に再生不良性貧血 (AA) および骨髄異形性症候群 (MDS) との鑑別が問題になることが多い。網状血小板 (RP) は細胞内に RNA を豊富に含む幼若な血小板であり、網状血小板比率 (RP%) は血小板寿命を反映していると考えられている。我々は Flow cytometry を用いた RP% 測定 (FCM 法) が ITP と再生不良性貧血の鑑別に有用であることを報告してきた。しかし、FCM 法は精度は高いものの高価な機器と煩雑な操作のため本法による網状血小板測定が実施可能な施設は限られている。近年、RP の自動測定が試みられ、シスメックス社製多項目自動血球分析装置を用いて、RNA が含まれる血小板分画を幼若血小板分画 (immature platelet fraction, IPF) として簡便かつ迅速に測定する方法が開発され、ITP と化学療法後の血小板減少の鑑別に最新機器である XN シリーズにおいては FCM 法に匹敵する有用性を示すことを明らかにした。

ITP の治療は、重篤な出血を回避するため安全と思われる血小板数を維持することを目標になされるが、出血リスクには血小板数だけでなく血小板機能も関与する。ITP 患者において検出される抗血小板抗体の多くは血小板機能に必須の分子である GPIIb-IIIa (α IIb β 3) や GPIb-IX 複合体を標的していることから、ITP 患者の血小板機能は正常者と異なる可能性がある。一方で、ITP 患者では血栓症の合併が意外に多いこと、また最近、難治性 ITP で広く使用されてきている TPO 受容体作動薬は血小板機能を亢進する可能性があることから、ITP 患者の血小板機能を把握することは治療方針の決定において重要である。しかし血小板機能検査のゴールドスタンダードとされる比濁法を用いた血小板凝集能検査は血小板減少患者においては信頼できるデータが得られない。我々は FCM を用いることにより血小板減少患者における血小板機能測定法を確立し、ITP 患者における血小板機能の評価を行い、TPO 受容体作動薬による血小板機能への直接的な影響は認められないことを明らかにした。

平成 27 年度厚生労働科学研究費補助金

難治性疾患政策研究事業

血液凝固異常症等に関する研究班

研究代表者：村田 満

事務局：慶應義塾大学医学部臨床検査医学

富田ゆかり・佐野有果

村田教授室TEL：03-5363-3838

